

誰もが、ただ、いい場所。



西本願寺

実如上人五百回忌法要

2025(令和7)年

4月12日・13日

本如上人二百回忌法要

4月13日・14日

立教開宗記念法要

《春の法要》

4月15日

経文を掲載しております。
大切にお取り扱いください。

恩徳讃



如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

目次

恩徳讃

..... 1

ご挨拶

〈浄土真宗本願寺派総長 園城義孝〉
〈本願寺執行長 藤實無極〉
..... 3

伝灯奉告法要 ご親教「念仏者の生き方」
..... 5

浄土真宗の教章（私の歩む道）
..... 7

法要・行事日程／講社紹介
..... 8

本願寺LINE公式アカウント開設／
..... 10

はとけさまのお話／お西さんを知ろう！
..... 10

実如上人を讃仰して
..... 11

本如上人を讃仰して
..... 15

五会念佛作法
..... 19

正信念佛偈
..... 26

「共通勤行」和訳正信偈
..... 31

国宝・文化財特別公開
..... 35

平和フォーラム開催
..... 36

帰敬式
..... 37

「院号」をいただくには
..... 38

免物
..... 39

「令和6年能登半島地震災害義援金」募集について
..... 40

お西さんの奉仕団（半日バージョン）
..... 41

宗祖降誕会のご案内
..... 42

2025(令和7)年

実如上人五百回忌法要

4月12日・13日

本如上人二百回忌法要

4月13日・14日

立教開宗記念法要(春の法要)

4月15日

宗祖親鸞聖人が『顕浄土真実教行証文類(教行信証)』を撰述された一二二四(元仁元)年を浄土真宗立教開宗の年と定め、毎年この春の時期に法要をお勤めしています。

本年は、この立教開宗記念法要を四月十五日に勤修いたしますとともに、四月十二日・十三日には本願寺第九代宗主実如上人五百回忌法要を、また、四月十三日・十四日には本願寺第十九代宗主本如上人の二百回忌法要をお勤めいたします。



実如上人五百回忌法要 本如上人二百回忌法要 立教開宗記念法要（春の法要）にあたって

浄土真宗本願寺派総長

その
園城

ぎ
義孝

本願寺執行長

ふじ
藤實

む
無極

みなさま、全国各地からようこそ本願寺へご参拝くださいました。

宗門では、宗祖親鸞聖人が一二三四（元仁元）年四月十五日に『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』をご撰述になりましたことを浄土真宗の立教開宗と定め、立教開宗記念法要（春の法要）を修行いたしております。

宗祖親鸞聖人が明らかにされた浄土真宗は、迷いの世界から抜け出せない私たちを、そのまま救うと常にはたらし続けていくくださる阿弥陀さまのご本願におまかせする教えです。今ここでの救いの中にもありながらも、そのお慈悲ひとすじにおまかせできない、よろこぶこ

とのできない私ではありますが、ご法要をご縁として阿弥陀さまに感謝申しあげ、お念仏申したいと存じます。

また、今年は、春の法要にあわせ、本願寺第九代宗主実如上人五百回忌法要に続いて、本願寺第十九代宗主本如上人二百回忌法要を修行いたします。

実如上人は、第八代宗主蓮如上人から法灯を継承され、本願寺第九代宗主として、蓮如上人の『御文章』による教化に努められ、教団の組織化、寺務・法務の円滑な執行にご尽力されました。

本如上人は、本願寺第十九代宗主に二十二歳で就任され、三業惑乱の収束に努められるとともに、日野誕生院の草創、および御影堂の修復事業を完遂され、一八一一年に親鸞聖人五五〇回大遠忌法要を修行されました。

本願寺歴代宗主をはじめ多数の先人方のご苦勞を偲びつつ、ご一緒にお勤めさせていただきましよう。

本日は、うらかな春のひとときを、本願寺でごゆっくりとお過ごしください。

合掌



伝灯奉告法要 ご親教「念仏者の生き方」

仏教は今から約二五〇〇年前、釈尊がさとりを開いて
 仏陀ぶつだとられたことに始まります。わが国では、仏教はも
 とと仏法ぶつぽうと呼ばれていました。ここでいう法とは、この
 世界と私たち人間のありのままの真実ということであり、
 これは時間と場所を超えた普遍的な真実です。そして、こ
 の真実を見抜き、目覚めた人を仏陀といい、私たちに苦悩
 を超えて生きていく道を教えてくれるのが仏教です。

仏教では、この世界と私たちのありのままの姿を「諸
 行無常しよぎょうむじやう」と「縁起えんぎ」という言葉で表します。「諸行無常」
 とは、この世界のすべての物事は一瞬もとどまることなく
 移り変わっているということであり、「縁起」とは、そ
 の一瞬ごとにすべての物事は、原因や条件が互いに関わ
 りあつて存在しているという真実です。したがって、そ
 のような世界のあり方の中には、固定した変化しない私
 というものは存在しません。

しかし、私たちはこのありのままの真実に気づかず、自
 分というものを固定した実体と考え、欲望の赴くままに
 自分にとって損か得か、好きか嫌いかなど、常に自己中心

の心で物事を捉えています。その結果、自分の思い通りに
 ならないことで悩み苦しんだり、争いを起こしたりして、
 苦悩の人生から一歩たりとも自由になれないのです。この
 ように真実に背いた自己中心性を仏教では無明むみょう、煩惱ぼんノウとい
 い、この煩惱が私たちを迷いの世界に繋ぎ止める原因と
 なるのです。なかでも代表的な煩惱は、むさぼり・いか
 り・おろかさの三つで、これを三毒の煩惱といえます。

親鸞聖人も煩惱を克服し、さとりを得るために比叡山ひえいざん
 で二十年にわたりご修行に励まれました。しかし、どれほ
 ど修行に励もうとも、自らの力では断ち切れない煩惱の
 深さを自覚され、ついに比叡山を下り、法然聖人のお導
 きによって阿彌陀如来あみだにょらいの救いはたらきに出遇あわれまし
 た。阿彌陀如来とは、悩み苦しむすべてのものをそのまま
 救い、さとりの世界へ導こうと願われ、その願い通りには
 たらき続けてくださっている仏さまです。この願いを、
 本願ほんがんといいます。我執がしよく、我欲がよくの世界に迷い込み、そこか
 ら抜け出せない私を、そのままの姿で救うとはたらき続
 けてくださる阿彌陀如来のご本願ほど、有り難いお

慈悲はありません。しかし、今ここでの救いの中にありませんが、その慈悲ひとすじにお任せできない、よろこべない私の愚かさ、煩惱の深さに悲嘆せざるをえません。

私たちは阿弥陀如来のご本願を聞かせていただくことで、自分本位にしか生きられない無明の存在であることに気づかされ、できる限り身を慎み、言葉を慎んで、少しずつでも煩惱を克服する生き方へとつくり変えられていくのです。それは例えば、自分自身のあり方としては、欲を少なくして足ることを知る「少欲知足」であり、他者に対しては、穏やかな顔と優しい言葉で接する「和顔愛語」という生き方です。たとえ、それらが仏さまの真似事といわれようと、ありのままの真実に教え導かれて、そのように志して生きる人間に育てられるのです。このことを親鸞聖人は門弟に宛てたお手紙で、「(あなた方は)今、すべての人びとを救おうという阿弥陀如来のご本願のお心をお聞きし、愚かなる無明の酔いも次第にさめ、むさぼり・いかり・おろかさという三つの毒も少しずつ好まぬようになり、阿弥陀仏の薬をつねに好む身となっておられるのです」とお示しになられています。たいへん重いご教示です。

今日、世界にはテロや武力紛争、経済格差、地球温暖

化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が山積しています。が、これらの原因の根本は、ありのままの真実に背いて生きる私たちの無明煩惱にあります。もちろん、私たちはこの命を終える瞬間まで、我欲に執られた煩惱具足の愚かな存在であり、仏さまのような執われのない完全に清らかな行いではありません。しかし、それでも仏法を依りどころとして生きていくことで、私たちは他者の喜びを自らの喜びとし、他者の苦しみを自らの苦しみとするなど、少しでも仏さまのお心になう生き方を目指し、精一杯努力させていただく人間になるのです。

国の内外、あらゆる人びとに阿弥陀如来の智慧と慈悲を正しく、わかりやすく伝え、そのお心になうよう私たち一人ひとりが行動することにより、自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現に努めたいと思います。世界の幸せのため、実践運動の推進を通し、ともに確かな歩みを進めてまいりましょう。

二〇一六(平成二十八)年十月一日

浄土真宗本願寺派門主 大谷 光 淳

※このご親教は、伝灯奉告法要初日にお示しくださいました。



浄土真宗の教章（私の歩む道）

教義

宗名
宗祖
（開山）

浄土真宗
親鸞聖人

ご誕生 一七三三年五月二十一日
（承安三年四月一日）

ご往生 一二六二年一月十六日
（弘長二年十一月二十八日）

浄土真宗本願寺派

龍谷山 本願寺（西本願寺）

阿弥陀如来（南無阿弥陀仏）

宗派
本山
本尊
聖典

・釈迦如来が説かれた「浄土三部經」

『仏説無量壽經』

『仏説観無量壽經』

『仏説阿弥陀經』

・宗祖 親鸞聖人が著述された主な聖教

『正信念仏偈』（教行信証）行巻末の偈文

『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』

・中興の祖 蓮如上人のお手紙

『御文章』

生活

宗門

阿弥陀如来の本願力によつて信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて仏となり、迷いの世に還つて人々を教化する。

親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来の信心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歡喜のうちに、現世祈祷などにたよることなく、御恩報謝の生活を送る。

この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝える教団である。それによつて、自他ともに心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する。



法要・行事日程

YouTubeチャンネル
「お西さんの法要行事」で
全日とも **LIVE** 配信
いたします。

12日(土) 実如上人五百回忌法要

總會所	御影堂	總會所	御影堂	兩堂
17時00分	14時00分	13時00分	13時00分	6時00分
お西さんの土曜法話(40分間) 本願寺派布教使 岩清水 成海師(和歌山県)		〔五会念佛作法〕 P.19 引き続き(特別布教)(20分間) 本願寺派布教使 西脇 晃純師(東京都) LIVE		晨朝 晨朝布教 〔晨朝〕 西脇 晃純師(東京都) 帰敬式(午前の部) 帰敬式(午後の部) 常例布教(30分1席) 〔昼座〕 西脇 晃純師(東京都)
実如上人五百回忌法要				

13日(日) 実如上人五百回忌法要

本如上人二百回忌法要

御影堂	總會所	御影堂	總會所	御影堂	兩堂
14時00分	13時00分	13時00分	11時30分	10時00分	6時00分
本如上人二百回忌法要 〔五会念佛作法〕 P.19 引き続き(特別布教)(20分間) 本願寺派布教使 野瀬 善隆師(滋賀県) LIVE		日曜講演 実如上人と本如上人のご生涯とご事績 岡村 喜史師(本願寺史料研究所上級研究員) 帰敬式(午後の部) 常例布教(30分1席) 〔昼座〕 野瀬 善隆師(滋賀県)		晨朝 帰敬式(午前の部) 実如上人五百回忌法要 〔正信念佛偈作法第三種〕 P.26 引き続き(特別布教)(20分間) 本願寺派布教使 野瀬 善隆師(滋賀県) LIVE	



14日(月) 本如上人二百回忌法要

多目的ホール	総会所	御影堂		多目的ホール	御影堂	両堂
15時30分	14時00分	13時30分	11時15分	11時15分	10時00分	6時00分
平和フォーラム 第2部 P.36		常例布教(30分2席)		平和フォーラム 第1部 P.36		帰敬式(午前の部)
(昼座) 野瀬 善隆師(滋賀県)		帰敬式(午後の部)		第四十五回全国講社大会		晨朝
				本願寺派布教使 野瀬 善隆師(滋賀県)		帰敬式(午前の部)
				引き続き(特別布教)(20分間) P.26		本如上人二百回忌法要
				引き続き(特別布教)(20分間) P.26		
				▶LIVE		

14日(月)
11時15分～
第45回
全国講社大会

本願寺全国講社連合会が主催し、毎年春の法要にあわせ開催しています。
講社は、浄土真宗の教えにもとづいて愛山護法の思いから本山本願寺を護り、阿弥陀如来さまのお慈悲の尊さ有り難さを、後の世まで広く伝えるため活動している本願寺に所属する団体です。

15日(火) 立教開宗記念法要

総会所	御影堂		両堂
15時00分	14時00分	13時00分	10時30分
常例布教(30分2席)	宗祖月忌逮夜法要	帰敬式(午後の部)	縁儀
(昼座) 野瀬 善隆師(滋賀県)			立教開宗記念法要
			「共通勤行」和訳正信偈 P.31
			引き続き(御堂布教)(10分間)
			本願寺派布教使 野瀬 善隆師(滋賀県)
			▶LIVE





龍谷山 本願寺LINE公式アカウント開設



龍谷山 本願寺LINE公式アカウントを開設しました。
毎日のお勤め時間や帰敬式の日程をはじめ、大谷本廟の
受付混雑状況や、お西さんのYouTubeも検索いただく
ことができます。ぜひご活用ください。



LINE ID「@hongwanji」

ほとけさまのお話



お西さんの法話 毎日(11:00)／御影堂 15分1席 ※配信なし

YouTubeチャンネル「お西さんの法要行事」



晨朝〈朝のお勤め〉 毎朝(6:00)／阿弥陀堂・御影堂 ▶LIVE

お西さんの土曜法話 土曜日(17:00)／総会所 40分1席 ▶LIVE

YouTubeチャンネル「お西さんの常例布教」



昼座 毎日(14:00)／総会所 30分2席 ▶LIVE

※参加無料。また、各法座は状況により中止又は時間・会場等変更する場合がございます。

YouTubeによるお聴聞ができます！

毎日の晨朝・昼座とお西さんの土曜法話をYouTubeにて▶LIVE配信
しています。また、過去の法話(アーカイブ※)も公開中です。
上記チャンネルから、いつでもどこでもお聴聞していただけます。

※(アーカイブ配信)は期間限定公開(諸事情により公開されない場合もございます)。



「お西のお坊さん」による境内案内 お西さんを知ろう！

本願寺の僧侶「お西のお坊さん」が、両堂や
境内各所を法話を交え、ご案内いたします。
どなたでも何でもご参加いただけます。
参加希望の方は、上記開催時間までに
お茶所にお越しください。

※本法要期間中も開催いたします。



1日4回 所要時間…約30分

集合場所：お茶所

1回目 10:00～ 2回目 11:30～
3回目 13:45～ 4回目 15:30～

ご参加いただいた方には…

オニシ
024Card 全24種

1枚をプレゼント！

本願寺の見どころを
紹介する
オリジナルカードです。



何がもらえるかは
お楽しみ！

実如上人を鑽仰して

本願寺史料研究所上級研究員

岡村喜史



実如上人影像（本願寺所蔵）

本願寺を継職

本願寺第九代実如上人は、長祿二年（一四五八）に第八代蓮如上人の五男として、京都東山の大谷本願寺で誕生されました。童名は光養丸でした。母は、室町幕府の將軍家に仕える奉公衆の伊勢貞房の娘で、後に蓮祐尼れんゆうにと名乗りました。

実如上人が誕生されたころの本願寺は、蓮如上人によつて教団改革が進められていた時でした。蓮如上人は、近江国（滋賀）南部の村々に金字十字名号（きんごじゅうめいごう）^{じじゅうぼうむげこうらい}（盡十方无導光如来）を本尊とした道場を次々に創建していかれました。ところが比叡山は、十字名号にある「无導光」について、どのような悪事をはたらitem最後に念仏を称えれば阿弥陀如来によつて救われるとして、社会秩序を乱すことを勧める「無礙光宗（衆）」^{むげこう}



実如上人関係略年譜

長祿二年 (一四五八)	一歳	八月二〇日	誕生。童名光養丸。
寛正六年 (一四六五)	八歳	一月九日	比叡山衆徒、大谷本願寺を破却する。
		三月二日	比叡山衆徒、再び大谷本願寺を破却する。
応仁二年 (一四六八)	一二歳	三月二八日	蓮如上人、実如上人に譲状を書く。
文明六年 (一四七四)	一七歳		青蓮院尊応のもとで得度する。
延徳元年 (一四八九)	三三歳	八月二八日	蓮如上人、寺務を実如上人に譲る。
延徳二年 (一四九〇)	三三歳	一〇月二八日	蓮如上人、再び実如上人に譲状を書く。
明応八年 (一四九九)	四二歳	三月二五日	蓮如上人寂(八五)。
明応九年 (一五〇〇)	四三歳	二月一五日	長男・照如寂。
永正一六年 (一五一九)	六二歳		一門一家の制を定める。
大永元年 (一五二二)	六四歳	八月二〇日	次男・円如寂。
大永五年 (一五二五)	六八歳	一月二〇日	証如上人に譲状を書く。
		二月二日	示寂。謚教恩院。

だと一方的に非難し、寛正六年(一四六五)、二度にわたって比叡山の衆徒が大谷本願寺を破却しました(寛正の法難)。

蓮如上人は、応仁二年(一四六八)三月に自身の隠退と当時末子だった光養丸へ家督を譲ることを条件に比叡山と和解しました。そして翌年三月二十八日に蓮如上人は、光養丸に「譲状」を書きました。ただ、この時実如上人はわずか十一歳でしたので、その後も蓮如上人が実質的に本願寺宗主の職務を続けられました。

文明六年(一四七四)、実如上人は十七歳で日野重光の猶子となり、ほどなく青蓮院尊応のもとで得度し、諱を光兼と名乗られました。そして文明十五年五月に蓮如上人の長男の順如上人が没した後は、実如上人が蓮如上人を助けて本願寺教団の維持に尽力されました。

延徳元年(一四八九)八月二十八日に蓮如上人が隠居されると、実如上人は本願寺を継職されました。そして翌年十月二十八日に蓮如上人は、再び実如上人に宛てた「譲状」を書かれました。

継職後の実如上人

本願寺継職後の実如上人は、蓮如上人と同じようにたくさんのお名号を書いて門末に授与されました。

また実如上人は、お名号の授与とあわせて阿弥陀如来絵像（方便法身尊像）を次々と授与されました。阿弥陀如来絵像には裏書が貼付されているため、いつ誰からどの誰に授与されたものがわかります。

その裏書によると、阿弥陀如来絵像の授与は、本願寺を継職された翌九月から開始され、示寂される直前まで続けられました。授与先は、北は北海道の松前から、南は宮崎県串間市までの全国各地に及び、その数は一〇〇〇点以上とも言われています。

実如上人は、蓮如上人がお名号を授与されてきたご縁の人びとに、裏書を付けた阿弥陀如来絵像を授与して、その地域の人びとが本願寺の門徒である意識させ、本願寺教団への帰属していることを明らかにしていきました。

実如上人は、蓮如上人から本願寺の継職を求められた時、再三これを固辞されました。その理由について

実如上人は、真宗の教義をしっかりと理解していないので全国の門徒を十分に勧化できないためと答えられました。すると蓮如上人は、自身が作った「御文章」を示して、これに署名と花押（証判）を添えて人びとに授与すれば門徒は信心をしっかりと持てるようになる」と助言されました。そこで実如上人は、御文章に「釈実如（花押）」と書いて門末に授与されました。さらに実如上人は、蓮如上人が作られたたくさんのお文章のなかから大切なものを八〇通選んで五冊にまとめられました。これが『五帖御文章』で、今でもお勤めの後で拝読されているのです。

蓮如上人には十三人の男の子どもがいました。これらのほとんどが北陸地方や近畿地方の寺院の住職となりました。さらにその子どもも分家するなどしていきました。そこで、永正十六年（一五一九）に実如上人は、このように各地で寺院を維持していた一族の長男を一門衆とし、次男以下を一家衆とする「一門一家の制」を定められました。これは、蓮如上人のころから全国的にひろがった本願寺教団について、各地域で中核となる寺院を一門一家に指定して組織化を図った



たのです。

本願寺を全国的教団へ発展させられた実如上人の名声は、遠く中国の明にも届いたようで、杭州の絵師詹仲和は、正徳八年（永正十年・一五二三）に「墨竹画」を描き、賛を書いて山科本願寺へ届けました。



墨竹画（本願寺所蔵）

実如上人の示寂

本願寺教団は、蓮如上人の時から社会的地位が向上しました。しかし一方、戦国時代という激動期にあつて各地で戦乱が繰り返されると、どうしてもそれらの勢力争いに巻き込まれてしまうこととなりました。そのようななかでも、実如上人はなんとか本願寺教団の維持に尽くされました。

実如上人の長男の照如が明応九年（一五〇〇）

に二十二歳で没した後、次男の円如も大永元年（一五二二）八月二十日に三十二歳で没してしまいました。そこで、同四年一月十日には、円如の長男の光養丸（後の証如上人）に「譲状」を書いて本願寺の後継者に指名されました。ところがこの時光養丸はわずか十歳でしたので、同月二十八日に実如上人は弟の蓮悟・蓮淳らに後事を託されました。そして、同年二月二日、実如上人は六十八歳で示寂されました。院号（諡）は教恩院です。

実如上人は、蓮如上人によって全国的にひろがった門徒を、しっかりと本願寺教団へと組織化していかれたのでした。



実如上人廟所

本如上人を鑽仰して

本願寺史料研究所上級研究員

大原 実代子



本如上人影像（本願寺所蔵）

本如上人の継職

本如上人は、安永七年（一七七八）十月二十四日に誕生しました。父は文如上人^{もんじょ}、母は文如上人に仕える増子（蓮淨院氷心）で、童名を孟^{はつ}といいました。この時の本願寺門主は、本如上人の祖父法如上人でした。

この頃の日本は、天災地変（浅間山噴火など）や大飢饉^{ききん}が起り、世情不安な状況でした。徳川幕府や藩では財政が破綻するなど、財政改革が必要な状態でした。また本願寺の財政も厳しい状況にありました。

本如上人は、天明三年（一七八三）六歳の時に御経の稽古を始めています。前年に文如上人の後継者、義千代（大義院法位）が没したこともあり、幼少から法



本如上人関係略年譜

安永七年 (一七七八)	一歳	一〇月二十四日	誕生。童名孟。
寛政元年 (一七八九)	一二歳	一〇月二十四日	法如上人示寂(八三歳)。
寛政四年 (一七九二)	一五歳	一〇月二十五日	得度(法名本如、法諱光摂)。
寛政八年 (一七九六)	一九歳	三月六日	二条治孝忠女誠姫と結婚。
寛政九年 (一七九七)	二〇歳	九月二〇日	文如宗主とともに江戸下向。
寛政十一年 (一七九九)	二二歳	六月一四日	文如宗主示寂(五六歳)。 本如宗主継職。
文化五年 (一八〇八)	三一歳	八月二十五日	御筆初めの御書を披露。
文化七年 (一八一〇)	三三歳	二月	御影堂修復に着手。
文化八年 (一八一二)	三四歳	九月二五日 二八日	大谷本廟にて宗祖五五〇回 大遠忌を厳修。
文化九年 (一八一三)	三三歳	四月二六日	御影堂修復上棟。
文化十一年 (一八一五)	三三歳	三月一八日 二八日	宗祖五五〇回大遠忌を厳修。
文化十二年 (一八一六)	三三歳	一〇月二三日	二条治孝忠女昌姫(誠姫妹) と結婚。
文化十三年 (一八一七)	三三歳	二月一〇日	諸国門末へ御影堂修復成就 の消息を出す。
文化十四年 (一八一八)	三三歳	一〇月七日	顯証寺撰衆本了(のちの広 如宗主)を後継者とする。
文化十五年 (一八一九)	三三歳	二月二二日	示寂。謚信明院。

式の稽古に励んだものと思われます。

寛政元年(一七八九)十月に法如上人が示寂し、父文如上人が本願寺第十八代を継職しました。

本如上人は、同四年十月二十五日に十五歳で得度し、法名を本如、法諱を光摂と称し、後継者となりました。得度にあたっては、宗祖親鸞聖人が得度したとされる青蓮院より「剃刀」などが贈られています。

寛政九年、文如上人とともに、將軍の代替わり(家治死去、家斉將軍宣下)と本如上人得度お礼のために、江戸へ赴いています。この時は、往路は東海道、復路は東海道から美濃路というルートを通っています。

寛政十一年六月、父文如上人が没したため、本如上人は二十二歳で本願寺第十九代を継職しました。

三業惑乱を裁断

本如上人在職中の最も大きな出来事の一つに、教義理解をめぐる論争である三業惑乱の裁定があり



ます。三業惑乱は、身と口と意で仏に救いを求める三業帰命を正統学説だと主張する学林側（新義派）と、それを批判する安芸（広島）大瀛（だいえい）ら在野の学僧（古義派）との論争です。法如上人の代から始まったこの教学論争は、やがて全国の門徒の間にも波及し、教団を二分する大論争となりました。事態の收拾を図るため、ついには江戸幕府の裁定を仰ぐこととなりました。

文化三年（一八〇六）七月十一日、学林側の新義派が不正義であるとの処分が出され、本願寺も百日間の閉門処分となりました。十一月四日に閉門が解かれ、本如上人は同六日に「御裁断御書」と消息を全国門末に出し、また、十二月には全国に使僧を派遣して裁断の趣旨を伝え、いちおうの決着をみました。

御影堂修復と大遠忌

寛永十三年（一六三六）に再建された御影堂は、五十年に一度の大遠忌ごとに修復の手が加えられて

きましたが、再建から百六十余年を経て、本格的な修復が必要となっていました。文化八年（一八一二）に親鸞聖人五百五十回大遠忌を迎えるにあたり、本如上人は継職後早々、御影堂修復という大事業に着手することとなりました。



御影堂棟札

『西本願寺展』図録（二〇〇三年、東京国立博物館）一九六頁より

継職翌年の寛政十二年（一八〇〇）八月、諸国門末に宛てて御影堂修復についての布達を出し、さらに京都・大坂の講中に肝煎役や諸役与力を依頼しました。

翌享和元年（一八〇一）には、御影堂修復新始を行いました。各地の別院修復・再建事業や三業惑乱の裁判（江戸への旅費・滞在費）などで多額の費用を要したこともあり、修復費用が確保できず、工事はなかなか進められませんでした。



本如上人筆「梅図」
(本願寺所蔵)

上人は、再三諸国門末に向け、修復懇志上納を依頼する消息を出して協力を求めました。文化三年に三業惑乱問題が決着したこともあり、本格的に修復工事を始めることができました。約十年の歳月をかけ、全国門末からの資材の寄進や懇志などの尽力により、ようやく文化七年四月に上棟、十一月に完成しました。そして翌年三月十八日から二十八日、宗祖親鸞聖人五百五十回大遠忌法要を無事に勤めることができました。

本如上人には、碧山へきざんや不捨ふしやという号がありました。和歌を冷泉等れいぜいとう覚たけやす(為泰)に、雅楽を四辻公亨よつじきんみちに師事し、東儀季邑とうぎすえさからも指導を受け、絵は吉村孝敬よしむらこうけいに師事しました。円山派や四条派の絵師らとも交友があり、彼らとの緊密さは、本願寺での茶会に、絵師の円山応瑞おうえん、

茶道の藪内紹智やぶのうちじょうち、東儀季邑らが何度も来山していることや、本願寺御影堂余間の蓮池図や書院の障壁画しょうへきがに、円山派・四条派の絵師が携わっていることからわかります。

本如上人の示寂

本如上人は、寛政八年(一七九六)に二条治孝にじょうはるたかの娘のぶひめ誠姫と結婚しましたが、文化元年(一八〇四)に死別しました(専心院如願)。同八年には二条治孝の娘(誠姫妹)昌姫と結婚しますが、どちらの間にも子どもはいませんでしたので、文政二年(一八一九)、河内(大阪府)顕証寺の文淳暉宣もんじんきせん(本如上人弟)の子撰衆本了を迎え後継者となりました(のち、広如光沢と改称)。

本如上人は文政九年十二月十二日、四十九歳で示寂されました。二十八年におよぶ治山でした。諡は信明院といえます。



五会念佛作法

五会念佛作法は、法照禪師（中国唐代）によって始められた「五会念佛」に由来する作法です。

本作法は、「三奉請」（善導大師『法事讃』上巻「行道讃梵偈」）に始まり、「念佛」・「誦讃偈（甲と乙）」・「莊嚴讃」そして「回向」で構成されており、行道中に唱えられる「誦讃偈」（甲と乙の二種で構成される）と、それに続く「莊嚴讃」のご文は、ともに法照禪師の『浄土五会念佛略法事儀讃』が出拠となっています。なかでも「誦讃偈」のご文については、親鸞聖人が『顕浄土真実教行証文類』行巻や『唯信鈔文意』で引用されました。

また譜については、その多くが、明治期に制定された作法の「五会念佛略法事讃」に依っています。特に「念佛」は、平調の譜で書かれており、これ自体が「五会念佛」冒頭（第一会）の「平声緩念」が同様の調子で唱えられたことに基づいています。



莊嚴讚

出律曲
音徵

亮越調

み だ がんぎようこう む へん

彌陀願行廣無邊

⑩ 徵
⑩ 徵
⑩ 徵
⑩ 徵
⑩ 角イロ
⑩ 商

同音 ひ さいぐんじよう ふ じんれん

悲濟群生普盡憐

⑩ 宮ハル
⑩ 宮イ
⑩ 徵
⑩ 徵
⑩ 徵
⑩ 角イロ
⑩ 商

そうよく けりよう き ほんごく

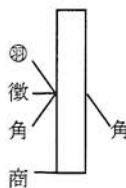
惣欲化令歸本國

⑩ 徵
⑩ 徵
⑩ 角イ
⑩ 徵
⑩ 商
⑩ 商
⑩ 商
⑩ 商

しゅじようざいごう ぐ む えん

衆生罪業共無縁

⑩ 徵
⑩ 徵
⑩ 徵
⑩ 徵
⑩ 徵
⑩ 角イロ
⑩ 商



⑩ 盤シ
⑩ 徵黄ラ
⑩ 角雙ソ
⑩ 商平ミ



かんのんばきつだいじひ

観音菩薩大慈悲

ン、ン、
徴、徴、
ツ、イ、
徴、
角イロ商

のうおくかいげんけう

能於苦海現希有

ハル、ン、
宮、
徴、
イ、ン、
徴、
角イロ商

しこんしんそうさんじうに

紫金身相三十二

徴、
一、徴、
ン、角イロ商、
徴、
商、
一、商、
一、商、

ちようだいみだそんじうじ

頂戴弥陀尊重時

う、
徴、
イ、
徴、
ン、
徴、
角イロ商

せいしばきつじんなんじ

勢至菩薩甚難思

イ、
宮、
徴、
ツ、ン、
徴、
角イロ商

しこんしんそうとうむき

紫金身相等無虧

ハル、ン、
宮、
徴、
ン、
徴、
う、
徴、
角イロ商

ちようじようほうびようこうけんせう

頂上寶瓶光顯照

徴、
一、徴、
う、角イロ商、
徴、
商、
一、商、
一、商、
一、商、

ふしうねんぶつおうじようき

普収念佛往生機

徴、
一、徴、
ン、
徴、
ツ、
う、
徴、
角イロ商



じきようおうじゃくしゅくえんじん

自慶往昔宿縁深

う、^⑨徴、^⑩徴、^⑪徴、^⑫徴、^⑬角、^⑭商

とくぐみだじようけうおん

得遇弥陀浄教音

ハル、^⑮宮、^⑯徴、^⑰徴、^⑱徴、^⑲角、^⑳商

しうじみようごうむくそく

執持名號無休息

う、^㉑徴、^㉒徴、^㉓角、^㉔商、^㉕徴、^㉖商、^㉗商、^㉘商、^㉙商

ほうじんりんじうしこんじん

報盡臨終紫金身

う、^㉚徴、^㉛徴、^㉜徴、^㉝徴、^㉞角、^㉟商

がじようじたんくしようごん

我常自嘆苦精勤

う、^㊱徴、^㊲徴、^㊳徴、^㊴徴、^㊵角、^㊶商

けもんむじようほししようしん

希聞無上法清真

ハル、^㊷宮、^㊸徴、^㊹徴、^㊺徴、^㊻角、^㊼商

しゅぐむみようぞくとうせん

須共无明賊闘戦

う、^㊽徴、^㊾徴、^㊿角、[㋀]商、[㋁]徴、[㋂]商、[㋃]商、[㋄]商、[㋅]商

せいとうはめつしゅこんしん

誓當破滅取金真

イ、[㋆]徴、[㋇]徴、[㋈]徴、[㋉]徴、[㋊]角、[㋋]商

一念凝神往寶城

ろくつうき
いかしんきよう

六通起意覺身輕

そくとうせんにようれんげじょう

足踏千葉蓮華上

ク  徴
う  徴
ソ  角 徴
う  商 徴
ン  商
　  商
う  商

みようがツまにじゅげぎょう

明月摩尼樹下行

う  徴
ツ  徴
 徴
 徴
う  角
商 

彌陀淨刹甚精微

ひ
し
よ
し
や
ば
に
ん
き
ち

彼處娑婆人豈知

ハル    宮
徴
徴
ン   徴
角
商

こうごうちんりん おくかい

曠劫沈淪於苦海

う 
う 
角 
商 
商 
イ 

がねんとくぐおうじょうじ

何年得遇往生時

 徴
 ン 徴
 ク 徴
 徴
 う 徴
 う 徴
 角
 商



ごくらくほうこくむすいへん

極樂寶國無衰變

⑤ 徴 ク ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 角イロ ⑤ 商

びやくごくろうだいてんじねん

碧玉樓臺天自然

⑤ ハル ク ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 角イロ ⑤ 商

まにみようがツるりすい

摩尼明月瑠璃水

⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 角イロ ⑤ 商 ⑤ 徴 ⑤ 商 ⑤ 商 ⑤ 商 ⑤ 商

こうみようちだいしんかれん

光明池臺真可憐

⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 角イロ ⑤ 商

ごくらくほうかいじんけう

極樂寶界甚希有

⑤ 徴 ク ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 角イロ ⑤ 商

じついたしょうらいふち

實爲多生来不知

⑤ バツ ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 角イロ ⑤ 商

こんにちきぐみだそん

今日喜遇彌陀尊

⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 角イロ ⑤ 商 ⑤ 徴 ⑤ 商 ⑤ 商 ⑤ 商 ⑤ 商

とんしゃしゃばごじよくじ

頓捨娑婆五濁時

⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 徴 ⑤ 角イロ ⑤ 商

彌陀寶界不思議

唯ニ歎ニ娑婆ニ去ニ者ニ希ニ

阿鼻地獄人多往

一 墮何年更出時

徴^⑤ 歸^⑤ 去^⑤ 来^⑤ 今^⑤ 歸^⑤ 去^⑤ 来^⑤
 イ 一 イ 一 イ 一 角^⑤ 商^⑤

閻ミヤ浮ウ五イ濁ダク是シ塵チン埃アイ

不如西方快樂處

とうひけだいずい

到^{カニ}彼^上華臺隨意開
徴^う 徴 徴 徴 徴^{かい}



正信念佛偈

宗祖親鸞聖人がおつくりになったもので、一般に「正信偈」として親しまれ、日常のお勤めに用いられる、もつともなじみ深い偈文（詩）です。

はじめに「帰命無量寿如来 南無不可思議光（限りない命の如来に帰命し、思いはかることのできない光の如来に帰依したてまつる）」とご自身の信心を述べられ、ついで『佛説無量寿經』（大經）のおこころとインドの龍樹菩薩・天親菩薩、中国の曇鸞大師・道綽禪師・善導大師、日本の源信和尚・源空（法然）聖人のお導きを明らかにされています。

そして「応信如来如実言（釈尊のまことの教えを信ずるがよい）」、「唯可信斯高僧説（この高僧方の教えを仰いで信ずるがよい）」と、釈尊がお説きくださった阿弥陀如来のみ教えと、このみ教えをお伝えくださった前述の七高僧のお導きにしたがうことを勧められています。

すなわち、この偈文は、南無阿弥陀佛のおよび声に素直にしたがわれた聖人ご自身の「信心のよろこびの詩」であり、すべての人びとが阿弥陀如来の救いにあずかってほしいという聖人の思いが込められています。



○

重じゅう 五ご 超ちよう 建こん 国こく 覩と 在ざい 法ほう 南な 歸き
 誓せい 劫こく 発はつ 立りつ 土ど 見けん 世せ 蔵ぞう 無も 命みょう
 名みょう 思し 希け 無む 人にん 諸しよ 自じ 菩ぼ 不ふ 無む
 声しょう 惟ゆい 有う 上じよう 天てん 仏ぶつ 在ざい 薩さつ 可か 量りよう
 聞もん 之し 大だい 殊しゆ 之し 淨じよう 王おう 因いん 思し 寿じゆ
 十じつ 摂しやう 弘く 勝しやう 善ぜん 土ど 仏ぶつ 位に 議ぎ 如にょ
 方ぼう 受じゆ 誓せい 願がん 惡まく 因いん 所しよ 時じ 光こう 来らい

必ひつ 成じよう 至し 本ほん 一いつ 超ちよう 不ふ 清しやう 無む 普ふ
 至し 等とう 心しん 願がん 切さい 日にち 断だん 淨じよう 碍げ 放ほう
 滅めつ 覺かく 信しん 名みょう 群ぐん 月がつ 難なん 歡かん 無む 無む
 度ど 証しやう 樂ぎやう 号ごう 生じよう 光こう 思し 喜ぎ 对たい 量りよう
 願がん 大だい 願がん 正しやう 蒙む 照しやう 無む 智ち 光こう 無む
 成じよう 涅ね 為に 定じよう 光こう 塵じん 称しやう 慧え 炎えん 辺へん
 就じゆ 槃はん 因いん 業ごう 照しやう 刹せつ 光こう 光こう 王おう 光こう

已い 摂せつ 如にょ 凡ぼん 不ふ 能のう 応おう 五ご 唯ゆい 如にょ
 能のう 取しゆ 衆しゆ 聖じよう 断だん 発はつ 信しん 濁じよく 説せつ 来らい
 雖すい 心しん 水し 逆ぎやく 煩ぼん 一いち 如にょ 惡あく 弥み 所しよ
 破は 光こう 入にゅう 謗ぼう 惱のう 念ねん 来らい 時じ 陀だ 以い
 無む 常じよう 海かい 齊さい 得とく 喜き 如にょ 群ぐん 本ほん 興こう
 明みょう 照しやう 一いち 回え 涅ね 愛あい 実じつ 生じよう 願がん 出しゅつ
 聞あん 護ご 味み 入にゅう 槃はん 心しん 言ごん 海かい 海かい 世せ



是 ^ぜ	仏 ^{ぶつ}	聞 ^{もん}	一 ^{いつ}	即 ^{そく}	獲 ^{ぎやく}	雲 ^{うん}	譬 ^ひ	常 ^{じょう}	貪 ^{とん}
人 ^{にん}	言 ^{ごん}	信 ^{しん}	切 ^{さい}	横 ^{おう}	信 ^{しん}	霧 ^む	如 ^{にょ}	覆 ^ふ	愛 ^{あい}
名 ^{みょう}	広 ^{こう}	如 ^{にょ}	善 ^{ぜん}	超 ^{ちよう}	見 ^{けん}	之 ^し	日 ^{にっ}	真 ^{しん}	瞋 ^{しん}
分 ^{ぶん}	大 ^{だい}	来 ^{らい}	惡 ^{まく}	截 ^{ぜつ}	敬 ^{きやう}	下 ^げ	光 ^{こう}	実 ^{じつ}	憎 ^{ぞう}
陀 ^だ	勝 ^{しょう}	弘 ^ぐ	凡 ^{ぼん}	五 ^ご	大 ^{だい}	明 ^{みやう}	覆 ^ふ	信 ^{しん}	之 ^し
利 ^り	解 ^げ	誓 ^{ぜい}	夫 ^ふ	惡 ^{あく}	慶 ^{きやう}	無 ^む	雲 ^{うん}	心 ^{じん}	雲 ^{うん}
華 ^け	者 ^{しゃ}	願 ^{がん}	人 ^{にん}	趣 ^{しゆ}	喜 ^き	闇 ^{あん}	霧 ^む	天 ^{てん}	霧 ^む

為 ^い	釈 ^{しゃ}	明 ^{みやう}	顕 ^{けん}	中 ^{ちゆう}	印 ^{いん}	難 ^{なん}	信 ^{しん}	邪 ^{じゃ}	弥 ^み
衆 ^{しゆ}	迦 ^か	如 ^{にょ}	大 ^{だい}	夏 ^か	度 ^ど	中 ^{ちゆう}	樂 ^{がく}	見 ^{けん}	陀 ^だ
告 ^{ごう}	如 ^{にょ}	来 ^{らい}	聖 ^{しょう}	日 ^{じち}	西 ^{さい}	之 ^し	受 ^{じゆ}	憍 ^{きやう}	仏 ^{ぶつ}
命 ^{みやう}	来 ^{らい}	本 ^{ほん}	興 ^{こう}	域 ^{いき}	天 ^{てん}	難 ^{なん}	持 ^じ	慢 ^{まん}	本 ^{ほん}
南 ^{なん}	楞 ^{りやう}	誓 ^{ぜい}	世 ^せ	之 ^し	之 ^し	無 ^む	甚 ^{じん}	惡 ^{あく}	願 ^{がん}
天 ^{てん}	伽 ^が	応 ^{おう}	正 ^{しやう}	高 ^{こう}	論 ^{ろん}	過 ^か	以 ^に	衆 ^{しゆ}	念 ^{ねん}
竺 ^{じく}	山 ^{せん}	機 ^き	意 ^い	僧 ^{そう}	家 ^げ	斯 ^し	難 ^{なん}	生 ^{じやう}	仏 ^{ぶつ}

応 ^{おう}	唯 ^{ゆい}	自 ^じ	憶 ^{おく}	信 ^{しん}	顕 ^{けん}	証 ^{しょう}	宣 ^{せん}	悉 ^{しつ}	龍 ^{りゆう}
報 ^{ほう}	能 ^{のう}	然 ^{ねん}	念 ^{ねん}	樂 ^{がく}	示 ^じ	歡 ^{かん}	說 ^{ぜつ}	能 ^{のう}	樹 ^{じゆ}
大 ^{だい}	常 ^{じやう}	即 ^{そく}	弥 ^み	易 ^い	難 ^{なん}	喜 ^ぎ	大 ^{だい}	摧 ^{さい}	大 ^{だい}
悲 ^ひ	称 ^{しょう}	時 ^じ	陀 ^だ	行 ^{ぎやう}	行 ^{ぎやう}	地 ^ち	乘 ^{じやう}	破 ^は	士 ^じ
弘 ^ぐ	如 ^{にょ}	入 ^{にゅう}	仏 ^{ぶつ}	水 ^{すい}	陸 ^{りく}	生 ^{しやう}	無 ^む	有 ^う	出 ^{しゅつ}
誓 ^{ぜい}	来 ^{らい}	必 ^{ひつ}	本 ^{ほん}	道 ^{どう}	路 ^ろ	安 ^{あん}	上 ^{じやう}	無 ^む	於 ^と
恩 ^{おん}	号 ^{ごう}	定 ^{じやう}	願 ^{がん}	樂 ^{らく}	苦 ^く	樂 ^{らく}	法 ^{ほう}	見 ^{けん}	世 ^せ



即^{そく}得^{とく}必^{ひつ}帰^き為^い広^{こう}光^{こう}依^え帰^き天^{てん}
証^{しょう}至^し獲^{ぎやく}入^{にゅう}度^ど由^ゆ闡^{せん}修^{しゆ}命^{みょう}親^{じん}
真^{しん}蓮^{れん}入^{にゅう}功^く群^{ぐん}本^{ほん}横^{おう}多^た無^む菩^ぼ
如^{にょ}華^げ大^{だい}徳^{とく}生^{じやう}願^{がん}超^{ちやう}羅^ら碍^げ薩^{さつ}
法^{ほつ}藏^{ぞう}会^え大^{だい}彰^{しやう}力^{りき}大^{だい}顕^{けん}光^{こう}造^{ぞう}
性^{しやう}世^せ衆^{しゆ}宝^{ほう}一^{いつ}回^え誓^{せい}真^{しん}如^{にょ}論^{ろん}
身^{じん}界^{かい}数^{しゆ}海^{かい}心^{しん}向^{かう}願^{がん}実^{じつ}来^{らい}説^{せつ}

正^{しやう}往^{おう}報^{ほう}天^{てん}焚^{ほん}三^{さん}常^{じやう}本^{ほん}入^{にゅう}遊^{ゆう}
定^{じやう}還^{げん}土^ど親^{じん}焼^{じやう}藏^{ぞう}向^{かう}師^し生^{しやう}煩^{はん}
之^し回^ね因^{いん}菩^ぼ仙^{せん}流^る鸞^{らん}曇^{どん}死^じ悩^{のう}
因^{いん}向^{かう}果^が薩^{さつ}経^{ぎやう}支^し処^{しよ}鸞^{らん}園^{おん}林^{りん}
唯^{ゆい}由^ゆ顕^{けん}論^{ろん}帰^き授^{じゆ}菩^ぼ梁^{りやう}示^じ現^{げん}
信^{しん}他^た誓^{せい}註^{ちゆう}楽^{らく}淨^{じやう}薩^{さつ}天^{てん}応^{おう}神^{じん}
心^{じん}力^{りき}願^{がん}解^げ邦^{ほう}教^{きやう}礼^{らい}子^し化^げ通^{ずう}

像^{ぞう}三^{さん}円^{えん}万^{まん}唯^{ゆい}道^{どう}諸^{しよ}必^{ひつ}証^{しょう}惑^{わく}
末^{まつ}不^ふ満^{まん}善^{ぜん}明^{みやう}綽^{しやう}有^う至^し知^ち染^{ぜん}
法^{ほふ}三^{さん}徳^{とく}自^じ淨^{じやう}決^{けつ}衆^{しゆ}無^む生^{しやう}凡^{ばん}
滅^{めつ}信^{しん}号^{ごう}力^{りき}土^ど聖^{しやう}生^{じやう}量^{りやう}死^じ夫^ふ
同^{どう}誨^け勸^{かん}貶^{へん}可^か道^{どう}皆^{かい}光^{こう}即^{そく}信^{しん}
悲^ひ慇^{おん}專^{せん}勤^{こん}通^{つう}難^{なん}普^ふ明^{みやう}涅^ね心^{じん}
引^{いん}懃^{こん}称^{しやう}修^{しゆ}入^{にゅう}証^{しょう}化^け土^ど槃^{はん}発^{はつ}



即 ^{そく}	与 ^よ	慶 ^{きやう}	行 ^{ぎやう}	開 ^{かい}	光 ^{こう}	矜 ^{こう}	善 ^{ぜん}	至 ^し	一 ^{いつ}
証 ^{しやう}	韋 ^い	喜 ^き	者 ^{じゃ}	入 ^{にゅう}	明 ^{みやう}	哀 ^{あい}	導 ^{どう}	安 ^{あん}	生 ^{しやう}
法 ^{ほつ}	提 ^{だい}	一 ^{いち}	正 ^{しやう}	本 ^{ほん}	名 ^{みやう}	定 ^{じやう}	独 ^{どく}	養 ^{にやう}	造 ^{ぞう}
性 ^{しやう}	等 ^{とう}	念 ^{ねん}	受 ^{じゆ}	願 ^{がん}	号 ^{ごう}	散 ^{さん}	明 ^{みやう}	界 ^{がい}	惡 ^{あく}
之 ^し	獲 ^{ぎやく}	相 ^{さう}	金 ^{こん}	大 ^{だい}	顯 ^{けん}	与 ^よ	仏 ^{ぶつ}	証 ^{しやう}	值 ^ち
常 ^{じやう}	三 ^{さん}	応 ^{おう}	剛 ^{ごう}	智 ^ち	因 ^{いん}	逆 ^{ぎやく}	正 ^{しやう}	妙 ^{みやう}	弘 ^く
樂 ^{らく}	忍 ^{にん}	後 ^ご	心 ^{しん}	海 ^{かい}	縁 ^{えん}	惡 ^{あく}	意 ^い	果 ^か	誓 ^{ぜい}

憐 ^{れん}	本 ^{ほん}	大 ^{だい}	煩 ^{ぼん}	我 ^が	極 ^{ごく}	報 ^{ほう}	專 ^{せん}	偏 ^{へん}	源 ^{げん}
愍 ^{みん}	師 ^し	悲 ^ひ	惱 ^{のう}	亦 ^{やく}	重 ^{じゆう}	化 ^け	雜 ^{ざう}	歸 ^き	信 ^{しん}
善 ^{ぜん}	源 ^{げん}	無 ^む	障 ^{しやう}	在 ^{ざい}	惡 ^{あく}	二 ^に	執 ^{しゆう}	安 ^{あん}	広 ^{こう}
惡 ^{まく}	空 ^{くう}	倦 ^{けん}	眼 ^{げん}	彼 ^ひ	人 ^{にん}	土 ^ど	心 ^{しん}	養 ^{にやう}	開 ^{かい}
凡 ^{ぼん}	明 ^{みやう}	常 ^{じやう}	雖 ^{すい}	攝 ^{せつ}	唯 ^{ゆい}	正 ^{しやう}	判 ^{はん}	勸 ^{かん}	一 ^{いち}
夫 ^ふ	仏 ^{ぶつ}	照 ^{しやう}	不 ^ふ	取 ^{しゆ}	称 ^{しやう}	弁 ^{べん}	浅 ^{せん}	一 ^{いつ}	代 ^{だい}
人 ^{にん}	教 ^{きやう}	我 ^が	見 ^{けん}	中 ^{ちゆう}	仏 ^{ぶつ}	立 ^{りゆう}	深 ^{じん}	切 ^き	教 ^{きやう}

唯 ^{ゆい}	道 ^{どう}	拯 ^{じやう}	弘 ^く	必 ^{ひつ}	速 ^{そく}	決 ^{けつ}	還 ^{げん}	選 ^{せん}	真 ^{しん}
可 ^か	俗 ^{ぞく}	濟 ^{さい}	經 ^{きやう}	以 ^ち	入 ^{にゅう}	以 ^ち	来 ^{らい}	択 ^{じやく}	宗 ^{しゆう}
信 ^{しん}	時 ^じ	無 ^む	大 ^{だい}	信 ^{しん}	寂 ^{じやく}	疑 ^ぎ	生 ^{しやう}	本 ^{ほん}	教 ^{きやう}
斯 ^し	衆 ^{しゆ}	迦 ^{へん}	士 ^し	心 ^{しん}	静 ^{じやう}	情 ^{じやう}	死 ^じ	願 ^{がん}	証 ^{しやう}
高 ^{こう}	共 ^ぐ	極 ^{ごく}	宗 ^{しゆう}	為 ^い	無 ^む	為 ^い	輪 ^{りん}	弘 ^く	興 ^{こう}
僧 ^{そう}	同 ^{どう}	濁 ^{じやく}	師 ^し	能 ^{のう}	為 ^い	所 ^{しよ}	転 ^{でん}	惡 ^{あく}	片 ^{へん}
說 ^{せつ}	心 ^{しん}	惡 ^{あく}	等 ^{とう}	入 ^{にゅう}	樂 ^{らく}	止 ^し	家 ^げ	世 ^せ	州 ^{しゆう}



「共通勤行」和訳正信偈

○ひかりといのち きわみなき
阿弥陀ほとけを 仰がなん
法蔵比丘の いにしえに
世自在王の みもとにて

諸仏浄土の 因たずね
人天のよしあし みそなわし
すぐれし願を 建てたまひ
まれなる誓い おこします

ながき思惟の時へてぞ
この願選び 取りませり
かさねてさらに 誓うらく
わが名よひろく 聞えかし

十二のひかり 放ちては
あまたの国を 照します
生きとしいくる ものすべて
このみひかりの うちにあり

本願成就の そのみ名を
信ずるころろ ひとつにて
ほとけのさとる ひらくこと
願い成りたる しるしなり

教主世尊は 弥陀仏の
誓い説かんと 生れたもう
にのりの世にし まどうもの
おしえのまこと 信ずべし

信心ひとたび おこりなば
煩惱を断たで 涅槃あり
水のうしおと なるがごと
凡夫とひじり 一味なり

摂取のひかり あきらけく
無明の闇 晴れ去るも
まどいの雲は 消えやらで
つねに信心の そら覆う

よし日の雲に 隠るとも
下に闇なき ごとくなり
信心よろこび うやまえば
まよいの道は 截ちきられ



ほとけの誓い 信ずれば
いとおろかなる ものとても
すぐれし人と ほめたまい
白蓮華とぞ たたえます

南無阿弥陀仏の みおしえは
おごり・たかぶり よこしまの
はかるう身にて 信ぜんに
難きなかにも なおかたし

七高僧は ねんごろに
釈迦のみこころ あらわして
弥陀の誓いの 正機をば
われらにありと あかします

楞伽の山に 釈迦説けり
南天竺に 比丘ありて
よこしまくじき 真実のべ
安楽国に うまれんと

みことのままだに あらわれし
龍樹大士は おしえます
陸路のあゆみ 難けれど
船路の旅の 易きかな

弥陀の誓いに 帰しぬれば
不退のくらい 自然なり
ただよくつねに み名となえ
ふかきめぐみに こたえかし

天親菩薩 論を説き
ほとけのひかり 仰ぎつつ
おしえのまこと あらわして
弥陀の誓いを ひらきます

本願力の めぐみゆえ
ただ一心の 救いかな
ほとけのみ名に 帰してこそ
浄土の聖衆の かずに入れ

蓮華の国に うまれては
真如のさとる ひらきてぞ
生死の園に かえりきて
まよえる人を 救うなり

曇鸞大師 徳たかく
梁の天子に あがめらる
三蔵流支に みちびかれ
仙経すてて 弥陀に帰す

天親の論 釈しては
浄土にうまるる 因果も
往くも還るも 他力ぞと
ただ信心を すすめけり

まどえる身にも 信あらば
生死のままだに 涅槃あり
ひかりの国に いたりては
あまたの人を 救うべし



道綽^{どうしやくぜんじ}・禪師^{ぜんじ} あきらかに

聖道^{しょうどう}・浄土^{じょうど}の 門^{かど}わかち

自力^{じりき}の善^{ぜん}を おとしめて

他力^{たうりき}の行^{ぎやう}を すすめつつ

信^{しん}と不信^{ふしん}を ねんごろに

末^{すえ}の世^よかけて おしえます

一生^{いっしょう}悪^{あく}を 造^{つく}るとも

弘誓^{くわいぜい}に値^あいて 救^{すく}わるる

善導^{ぜんどう}大師^{だいし} ただひとり

釈迦^{しゃか}の正意^{しょうい}を あかしてぞ

自力^{じりき}の凡夫^{ぼんぷ} あわれみて

ひかりとみ名の 因縁^{いんえん}説^とく

誓^{ちか}いの海^{うみ}に 入^いりぬれば

信^{しん}をよろこぶ 身^みとなりて

韋提^{いだい}のごとく 救^{すく}われつ

やがてさとり 花^{はな}ひらく

源信^{げんしん}和尚^{かうしやう} 弥陀^{みだ}に帰^きし

おしえかずある そのなかに

真実^{まこと}報土^{ほうど}に うまるるは

ふかき信^{しん}にぞ よると説^とく

罪^{つみ}の人^{ひと}びと み名^なをよべ

われもひかりの うちにある

まどいの眼^めには 見^みえねども

ほとけはつねに 照^{てう}します

源空^{げんくう}上人^{しやうにん} 智慧^{ちえ}すぐれ

おろかなるもの あわれみて

浄土^{じょうど}真宗^{しんしやう} おこしては

本願^{ほんがん}念仏^{ねんぶつ} ひろめます

まよいの家^{いえ}に かえらんは

疑^{うたが}う罪^{つみ}の あればなり

さとり 国^{くに}に うまるるは

ただ信心^{しんじん}に きわまりぬ

七高僧^{しちこうそう}は あわれみて
われらをおしえ すくいます
世^よのもろびとよ みなともに
このみさとしを 信^{しん}ずべし

南^な南^な南^な南^な南^な南^な
無^む無^む無^む無^む無^む無^む
阿^あ阿^あ阿^あ阿^あ阿^あ阿^あ
弥^み弥^み弥^み弥^み弥^み弥^み
陀^だ陀^だ陀^だ陀^だ陀^だ陀^だ
仏^ぶ仏^ぶ仏^ぶ仏^ぶ仏^ぶ仏^ぶ



○十方衆生のためにとて

如来の法蔵あつめてぞ
本願弘誓に帰せしむる
大心海を帰命せよ

観音勢至もろともに

慈光世界を照曜し

有縁を度してしばらくも

休息あることなかりけり

たとひ大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

仏の御名をきくひとは

ながく不退にかなふなり

宝林宝樹微妙音

自然清和の伎楽にて

哀婉雅亮すぐれたり

清浄楽を帰命せよ

清風宝樹をふくときは

いつつの音声いだしつ

宮商和して自然なり

清浄勲を礼すべし

一一のはなのなかよりは

三十六百千億の

光明でらしてほがらかに

いたらぬところはさらになし

○願以此功德

平等施一切

同発菩提心

往生安楽国



4月12日・13日・14日・15日

国宝・文化財特別公開

※法要期間中、国宝・重要文化財を特別公開いたします。

※拝観にあたっては、本山重要文化財保護管理基金へのご協力をお願いいたします。

※受付は、終了30分前までです。

4/12(土) ①11:30～13:30

②実如上人五百回忌法要 特別布教後(14:45頃)～16:00

4/13(日) ①実如上人五百回忌法要 特別布教後(10:45頃)～13:30

②本如上人二百回忌法要 特別布教後(14:45頃)～16:00

4/14(月) ①本如上人二百回忌法要 特別布教後(10:45頃)～16:00

4/15(火) ①立教開宗記念法要 御堂布教後(11:30頃)～13:30

②宗祖月忌法要後(14:30頃)～16:00



飛雲閣

飛雲閣は、三層で柿葺きの屋根をもつ楼閣です。初層は入母屋造に唐破風と千鳥破風を左右に、二層は寄棟造の三方に小さな唐破風を配し、三層は寄棟造と変化に富んでいます。金閣・銀閣とともに京都三名閣と呼ばれています。

書院

桃山時代に発達した豪壮華麗な書院造りの代表的なもので、座敷飾(床・違棚・帳台構・付書院)を完備し、金碧障壁画や彫刻で飾られています。

203畳敷の大広間である対面所(鴻の間)と三室が一例に並ぶ白書院とに大別でき、また、書院には南能舞台(重要文化財)と現存する最古の能舞台である北能舞台(国宝)があります。



白書院



経蔵

延宝5年(1677)に建てられた経蔵内部には、天海僧正が刊行した「大蔵經(一切經)」が納められた巨大な八角の輪蔵があります。



「平和フォーラム」開催

テーマ

仏教の可能性を未来に開く ～戦後80年、「平和」創造に向けて～

平和フォーラム開催にあたり

2025年、日本は戦後80年を迎えます。私たち浄土真宗本願寺派には、戦前、無批判に国策に従い、戦争を仏教の名のもとで正当化し、積極的に加担した歴史があります。

その反省から、戦後、私たちは「平和」に向けたさまざまな取り組みを行ってきました。また、世界でも戦争が起きぬよう、たゆまぬ努力がなされてきたものの、多くの戦争や紛争が生じ、ロシアによるウクライナ侵攻や、ガザ地区をめぐるイスラエルとハマスの武力衝突など、現実には「いのち」の尊厳をふみにじる事態が生じています。

このような国内外の情勢のなかで、誰もが心安らかに日々の生活を送ることのできる、平和な世の中を未来に開いていくために、仏教・浄土真宗はどのような可能性を有しているのでしょうか。「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」という理念を掲げる私たちは、どのように現状に対峙し、「平和」のために何ができるのでしょうか。このたびの「平和フォーラム」を端緒として、真の「平和」に向けた道筋を考えていきます。



日時

2025(令和7)年
4月14日(月)

会場

本願寺聞法会館
3階 多目的ホール

第1部 11:15～13:00
第2部 15:30～17:40

第1部は、ライブ配信も行います
(宗派公式 YouTube チャンネル)

第1部

鼎談【鼎談者】

釈 徹宗 (相愛学園学園長、大阪教区如来寺住職)
赤松 徹眞 (本願寺史料研究所長)
寺本 知正 (浄土真宗本願寺派総合研究所副所長)



第2部

映画上映 『ドキュメンタリー沖縄戦
～知られざる悲しみの記憶～』

「ご参拝の皆さまへ

帰敬式のご案内

「当日のお申し込みでも

法名をいただくことができます」

帰敬式は「おかみそり」とも呼ばれ、

阿弥陀如来・親鸞聖人の御前で

浄土真宗の門徒としての自覚をあらたにし

お念仏申す日暮らしを送ることを誓う

大切な儀式です。

仏教をひらかれたお釋迦さまの「釋」の一字と

漢字二文字※からなる「法名」が授けられます。

「法名」とは、み教え（法）を依りどころとして

お浄土への道を歩ませていただく

仏弟子としての「名のり」です。

※漢字二文字は「經典（浄土三部經）や

親鸞聖人のご著書の中より選ばれています



本願寺HP



帰敬式のご案内

受式時間

【午前（朝）の部】

※本願寺にて毎日2回行っております。

晨朝（6時）に引き続き

【午後（昼）の部】

13時30分から

※逮夜法要（14時）がある場合は13時となりますので事前にご確認ください。

受付冥加金

【成人】 10,000円

※2022年4月より成人年齢は18歳

【未成年】 5,000円

※希望する法名（2文字）がある場合、所属寺住職と相談のうえ、法名を内願することができます。受式希望日より2か月前の申請が必要となり、上記冥加金に加えて10,000円以上の懇志をお納めいただきます。

受付場所

龍虎殿

申込方法

龍虎殿（参拝教化部）受付にて『帰敬式受式願』【※PDF形式ダウンロード可】と受式冥加金を添えてお申込みください。

事前に記入の上、封書またはファックスでお申込みいただくと受付時間が短縮されます。

※【お西さん（西本願寺）ホームページ】⇒【各種お申込み】⇒【帰敬式】からA4用紙にプリントしてご利用ください。

Q なぜ、法名は「釋〇〇」だけなのですか？

浄土真宗のみ教えは、みな等しくともにお浄土への道を歩ませていただくという教えですから、「釋〇〇」の法名以外に「信士・信女・居士・大姉」等の位号などは使いません。





「院号」をいただくには



院号 本願寺



「院号」を
いただくには

院号って何？



院号は、宗門へ貢献をされた方や、20万円以上の永代経懇志を納めていただいた方へお渡ししているものです。

おくられる院号は「○○院」の漢字3文字で浄書（墨書き）したものに本願寺印が押印されています。院号はご自身の希望の文字を入れて、内願することができます。帰敬式を受式されている方には、院号のあとに法名「釋○○」が併記されます。

院号・法名は生前にいただくことができるんだね！



院号とあわせて式章もいただけるんだね！



2015(08) 第 1300-002572-0001

永代読経修行之証

○○院 釋○○

命日 2022(令和4)年4月4日

寺名 本願寺 花子

00-00-00 蓮花本願寺

法名者 本願寺 太郎

〒000-0000 札幌市中央区南一条西五丁目

011-000-0000

同席 総永代読経第1種

2023(令和5)年3月5日

法名 門徒堂

寺址 茨城県本願寺町 本山本願寺

■ 永代読経修行之証

永代読経申し込み後、初めて法要に参加いただいた際に、「永代読経修行之証」という証書をお渡しします。この証書をお持ちいただいた方には、これ以降本願寺「阿弥陀堂」にて、原則1日2回修行される総永代読経法要にいつでもお参りいただき焼香することができます。

「院号」がいただける基準

- 寺院の門徒総代を通算20年(5期)以上経歴された方や、寺院の責任役員を通算12年(3期)以上経歴されるなどその功績が認められた方
- 宗門および本山に多額の永代読経懇志を進納された方(懇志20万円以上の永代読経扱いとして交付)

参拝教化部(永代経係)

※大谷本願でもお申し込みいただけます。
※お世話になっているお寺のある方は、そちらにご相談ください。

すべてのご家庭に阿弥陀様を

龍虎殿(参拝教化部)受付にてお迎えいただくことができます

〈左側〉蓮如上人(蓮師)



〈中央〉御本尊(阿弥陀如来)



〈右側〉親鸞聖人(宗祖・祖師)



※上記写真の他に六字尊号(南無阿弥陀仏)、九字尊号(南無不可思議光如来)、十字尊号(帰命尽十方無礙光如来)がございます。
 ※大きさと表装の違いにより冥加金額が変わりますので、詳しくは参拝教化部(免物係)までお問い合わせください。

いちよう・きく

いろいろな生活環境においても、心のよりどころとしてのご本尊を安置していただける小型の「いちよう」と「きく」があります。それぞれにご絵像と六字名号があります。



いちよう

(縦24cm×横19cm×奥行9cm) (縦17.2cm×横10.3cm×奥行2.9cm)

みょうが きん
 冥加金 30,000円



きく

みょうが きん
 冥加金 20,000円

Web申し込みが
 できるようになりました。
 ぜひ、ご利用ください。

申込フォームはこちら

門信徒／一般用



寺院用





浄土真宗本願寺派 たすけあい運動募金 「令和6年能登半島地震 災害義援金」 募集について

昨年1月1日発生の「令和6年能登半島地震」の被害は8教区に及び、最も被害の大きかった能登半島地域では多くの方が避難生活を余儀なくされており、寺院・門信徒ともに甚大な被害報告が寄せられました。宗派では、被災地の支援を目的に、2024(令和6)年1月5日より標記募金の募集を行っておりますので、引き続きご協力をお願い申し上げます。

記

1.募金の名称

浄土真宗本願寺派 たすけあい運動募金
「令和6年能登半島地震 災害義援金」

2.受付口座番号

郵便振替 01000-4-69957

加入者名 たすけあい募金

銀行振込

銀行 ゆうちょ銀行

店名 一〇九(イチゼロキユウ)店

番号 当座 0069957

名義 たすけあい募金

※通信欄に「能登地震」とご記入ください。住所、連絡先、領収書名のご記入をお願いします。


※インターネットバンキングにて振込の方は、振込日・金額・送金人・住所・連絡先・領収書名等についてメールアドレス(saigai-taisaku@hongwanji.or.jp)にお知らせをお願いいたします。

お預かりした募金は災害義援金として、被災地へお送りさせていただきます。

3.受付期間

2024(令和6)年1月5日(金)から継続

4.問い合わせ先

浄土真宗本願寺派伝道本部  社会部

TEL: 075-371-5181(代)

mail: saigai-taisaku@hongwanji.or.jp

龍虎殿・
安穏殿・お茶所・
聞法会館ロビー等に
募金箱を設置
しております。

※支援活動内容など最新情報は、浄土真宗本願寺派公式ウェブサイトでご確認いただけます。





国宝で特別体験 をしてみませんか？

西本願寺での清掃体験を通して、
浄土真宗のみ教えや、親鸞聖人のご生涯、
本願寺の歴史にふれていただけます。

開催日時	第1回	(令和7) 2025年	5月10日	土
	第2回	(令和7) 2025年	11月1日	土
	第3回	(令和7) 2025年	12月13日	土
	14:00~16:30 受付は龍虎殿1階にて行います。 10分前にはご集合ください。			

参加対象 | どなたでもおひとりさまからご参加いただけます。

定 員 | 各 50 名

参加懇志 | 1 名につき 3,000 円
※小学生以上は通常懇志、小学生未満は無料とします。

会 場 | 阿弥陀堂・御影堂・書院 他

内 容 | 阿弥陀堂・御影堂・渡り廊下・喚鐘廊下等の清掃作業

申込手順 | 3月24日(月)より受付開始。開催1週間前までに
参拝教化部念仏奉仕団担当へ電話、申込フォーム
または直接お申し込みください。

携 行 品 | 清掃奉仕のできる服装、念珠、雑巾1枚、健康保険証、
その他各々が必要とするもの。

連絡先 | 本願寺参拝教化部 念仏奉仕団担当
TEL.075-371-5181(代表)
FAX.075-371-7601(直通)



申込みフォーム

Time Schedule

14:10~

清掃

阿弥陀堂・御影堂の外陣や
縁側及び渡り廊下の清掃を
していただきます。

14:50~

書院案内・ 抹茶接待

参加者のみなさまを
特別に書院へご案内し、
国宝の鴻の間に抹茶を
召しあがりがいただきます。

16:00~

日没勤行参拝

本願寺での日没のお勤めを
一緒に。

16:10~

法話

最後に、ほとけさまの
お話を聞きます。

※「お西さんの奉仕団～半日バージョン～」への団体及び個人の参加については、1泊2日日程の念仏奉仕団の参加回数には
カウントされません。

※午後の帰敬式受式(冥加金1万円)を希望される方は12:30までに龍虎殿にて受付を済ませてください。



親鸞聖人の
ご誕生のお祝い

宗祖降誕会

二〇二五(令和七)年

五月二十日(火)・二十一日(水)

浄土真宗を開かれた親鸞聖人は一一七三年五月二十一日(承安三年四月一日)、京都の日野の里でお生まれになりました。

日野の里では、江戸時代からご誕生をお祝いする行事が行われていたと伝えられています。

一八七四(明治七)年五月二十一日、本願寺第二十一代宗主明如上人によって本願寺において宗祖降誕会が、営まれるようになりました。

現在では、五月二十日、二十一日の二日間、ご法要を勤め、併せて祝賀能・茶席などの行事を催しております。

五月二十日(火) 十四時

二十一日(水) 十時

十一時三十分

十二時三十分

逮夜法要(御影堂)

日中法要(御影堂)

宗祖降誕奉讃法要

雅楽献納会(御影堂)

祝賀能

とき

● 五月二十一日(水)

開場十二時

開演十二時三十分

ところ

● 南能舞台

※「観能券」が必要です。

本年の番組

一、能 花月
一、能 狂言 長光
一、能 熊坂

茶席

とき

● 五月二十日(火)

開場十二時三十分～十六時

● 五月二十一日(水)

開場九時三十分～十五時三十分

ところ

● 飛雲閣

※「茶席券」が必要です。

五月上旬より龍虎殿にて参拝懇志(五千円以上)をご進納の方に、「茶席券および観能券」をお渡しいたします。(五月二十日、二十一日は、白洲受付テントにて受付)また、二十一日九時より白洲受付テントで、観能券をお持ちの方に祝賀能の入場整理券をお渡しいたします。



本願寺 全体図



■諸注意

- ・気分が悪くなったり、けがをされた時
 - ・落し物を拾われた時、落し物をされた時
 - ・不審者・不審物を発見された時
- 最寄りの係員、または防災センターまでご連絡ください。

防災センター【直通：075-371-5191】

北境内地
駐車場

→の門から
出入りできます。
(通常時)

人はひとり。だからこそ、ご縁を見つめたい。

西本願寺

NISHI HONGWANJI

龍谷山本願寺(西本願寺)
〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル
TEL 075-371-5181 (代)
FAX 075-371-7601

- ♿ = 車椅子対応施設
- 🚻 = 車椅子対応エレベーター
- 🚽 = オーストメイト対応トイレ(多目的トイレ)
- 📶 = AED(自動体外式除動器)設置場所
- 📶 = Wi-Fi電波受信建物
- 📶 = 授乳室
- 📶 = 喫茶・食事処

